藩鑑 百一

戸川

内閣文庫
和書
三四六八二號
二八冊
一五九函
一一架

内閣文庫

番號	和 34682	
冊數	278（102）	
函號	159	1

藩鑑巻之百七十目録

三部二十六

戸川肥後守藤原達安

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

藩鑑巻之百七十

戸川

肥後守藤原達安(みちやす)ハ肥後守秀安(ひでやす)カ長男にしてはしめ助七郎と称す浮田秀家に仕へ備前國常山城に住す天正十八年従五位下に叙し肥後守に任す慶長四年故ありて浮田

家を去り武蔵國岩槻に潜居す
同五年
東照宮上杉景勝を征伐として陸奥
國に向はせられしとき供奉して
下野國小山にいたらしつるに石田
三成逆心して兵を擧たるよし聞え
て御馬を旋さるゝより達安卿
を承り御味方の諸将と同しく

美濃國に赴き同八月廿三日合渡川
を渡して一番に鎗を合せ敵を伐
うち戦功を励ませしかは御感を
蒙り此年備中國にて二万九千
石餘を賜ふ同十九年大坂御陣に
供奉し元和元年再乱には摂津國
尼崎城を守る其後
台徳院殿に昵近し奉り御出元に加

へらる寛永四年十二月卒年六十
一歳ニして卒せり　子孫縫殿助安風延寶七年十一月九歳ニして卒しけれハ所領を没収せられし安風か背去蕃達富ニ新地五千石を賜ひ父代か今ニ列す

一　戸川肥後守達安ハ永禄十年丁卯ニ生る
初名ハ助七郎といふ成人ニ及ひて人
雄健ニ過くして太く長けたる力
量ありて若きうちハ相撲をこのむ

こゝニ寺尾作左衛門ハ大鹿の角とおさ
さ高名年ハ八人舁の石一方と荷
ひ後ニ揃ものゝひしくるなとの強力
れものと称相撲ニして常ニらす毛と
取りける年老て歯なと露白髪ニ成
てハ二王なとのやうニ見えたり　戸川家譜

一　天正七年ニ浮田直家信長公ニ属し毛
利輝元の敵となりる毛利家攀候と合こ

小早川隆景備中へ出張して備前と備
中の境忍城ハ宇喜多家の城なり是ハ多
勢を以てせめ城を屠る其後備前津宮
郡辛川表へ押こむ是とゝさ備前の多
兵打出て大いなる合戦あり毛利勢敗
北す是を辛川陣といふ肥後当十三歳
初陣なり敵近く跳す是よ依て家人
共討取首を出す若年ゆへ首帳よ付る

一
松原彦右衛門十八九ばかりまて能
武者を討付首取よれり 戸川家譜 備前軍記
天正十五年三月秀吉公九州へ征伐向
毛利輝元浮田秀家 初陣 征先之九州へ下
向す前年より黒田如水豊後の大友長
宗我部元親伴讃の元中ありて城居と
構へ浮田毛利取りて能喜枝城を築さ
その以後秀吉公渡海ましくして豊後

日向の境高城を敵勢まてとりかこむ
備前の攻口肥後守より一番に討破る
宮部善祥坊陣に至りて夜中島津
義弘来りて攻む（島津中務攻るとも記あり）暁に至
りて大に戦ひ島津勢の死人山のこ
とくにして引去る此外豊後府内の
岩石城をせめ（豊前筑前の境）小熊城を責め其
外九州の城を残らす攻落り大隅薩
摩へ攻入けれハ島津修理大夫義久降
参す筑前博多にしはらく御逗留あ
りて御備陣ありて秀家御供あり所々
にをいて軍忠を励まし肥後守かせ
き夜も寝す自身夜廻りもせしと
あり　戸川家譜

一　天正十八年小田原御退治として三月
御発向ありて浮島原にをいて備前秀

家と武者競あるへ、さとの上意まて
秀吉公異形なる出立なり備前の勢潔白
なる出立肥後者遅し、さ然擬なり紫
勢より備前勢の軍装甚しく宜し、さと
此上意なり此陣よりハ岡豊前者ハ立す
肥後者一家老として進発す山中の
城とせめ落し翌日湯本まて攻寄る
秀吉公松山北本陣なり肥後者ハ備前の

先手まて湯本の小山よりよち登り小
田原城の首尾山よりくしる城近くなり
ハ城内より鉄炮とおして山の峰へ出
らせす鉄炮も放へ、さ指なし中吉
与兵衛百挺の頭まて足軽と召連まいり
て前よりハ出らせぬ先へ空へ放ちける
先まて合戦始まる天下の北旗本ハ向ひ
此松山なりハ近く関之削ち上意として

て御使と下され糯酒樽澤山に拝領
す異国に於て国中へハさよし御返り
備前の三家老ハ一日替りに先手す今
度ハ押掛りの事なれハ肥後守首尾の
山へとしつめ陣とところ長船紀伊守壱
日の先手に當る由ニ而延京左衛門組頭に
て旗本足軽ともと押立来るゟ戸川
玄蕃肥後守方後助左衛門跡勢と召具して来る

延京いもく今日ハ紀伊守番日なり玄蕃
殿ハさましとして玄蕃穂と取て怒り
ていもく何とやすきと左衛門敵に向
ひて跡役とて退くへきさゝ敵に向ひて
戦ニよハ當番にあらすとて玄場と
渡すへきさ様なし宿老應くなれとも一
足もやるましと鎗と取て馬よりおり
玄蕃十六歳なり左衛門功者にて玄蕃殿

若くして強情なりしとて却て
先へ押しむ中村弥右衛門と云者旗
奉行まて来されしめ配付る組子
に居さゝなりしか作組れ内よりい
もく弥右衛門ハ昨今まて同組に居
ていま此定めとやり知さる故に押と
ふ弥右衛門返答に配付る度組ゆしハ
其趣にすへしいま肥後に従へハ用

ひす武士道と知らすしてしすら
と云て旗とすゝめて首尾山に登り
旗と建なりし是よりのちこの表口と云
らすして柵とかり井楼とあけて
大筒と打けるより以後金堀と呼ひて穴と
掘櫓へ取りかけるに内より砂と炒て
掛けるなり諸手ともにかくのこと
く落城まて取詰め是と攻むへき後小

田原滅却して猶明さ奥州へ御進發
備前宰相秀家も御供なり白川にといふ
て撿地と成り肥後守組家人筈と出
し急に撿地調べ御陣の後貸金
銀筈と下され此小田原陣は殊の外
さましの城攻にてあり備前の手
れ撿もぬ事は是と載せず 戸川家譜 戸川家旧記

一天正十九年のころ浮田宰相秀家成人
ましく器量と以ての儀の人成り
ますまてもなく天下の御聟にて御
威勢盛人なり家老ともは少なからす大坂
へ詰る国豊前守宿老にて勇武人に勝
れし才智ありて能臣と世にも以ちり秀
吉公の御前能して物ごとにつきて
言上して是と勤む備前國の仕置大坂
屆候ともに一人して中付るに異議

ゞる者なし公私ともに順に熟して
識に秀吉公の全盛となりし肥後守ハ
豊州堺さらに住て家臣の内にハおつ
つきて盛あり大坂幕下に進勤せり
去夏の夜に秀吉公秀家の亭に御成あ
りて涼所の茶庭に御座成されし小西摂
津守御前にありて明年高麗へ進発
れ軍議あり茶庭廊下に肥後守源に肥
後守ハ平出氏桂子と申せし人と被遊まて
縁の上に最早小西朝鮮の事ともに及
やうにまかせよと御機嫌なりしす御座
敷へ入御のとき茶庭と座敷の間に土
壇あり肥後守に願ひ出し人との上意に
て願ひ奉りて縁に上りさせてしく強
き願ひやうにもなと御褒美あり　戸川家譜

一　文禄元年朝鮮陣に諸勢四月に渡海

す関白殿下肥後名護屋に在陣し
國関東奥州までの大名小名みな名
護屋へ詰る浮田宰相秀家ハ第八番目の
渡海にて先渡の諸将日次あしく
ていまた渡り残り居る所に小西
摂津守行長先手として武勇を励
まし所々の城を攻落すよし注進
あり秀家家老中を集めていひけるハ
長朝鮮において危事ありと聞彼
深く進みて屍を異域にさらさハ殿
下の損失なり我命を捨へハさるにあらす
渡海して敵ハ人ともおもハすとあり家
臣とも諫之しとゝむ是殿下朝鮮へ
渡る事を悦び思召を以て皆々是に同
し五月に出船す肥後守一番に出船し
て釜山浦に着し秀家も渡着ありて

行長に對談して舩を釜山浦の間に
城邑（城と名付）をとりに秀家の勢を入て肥後守も
一所を詰り居て近所の村里を探索す

一

肥後守達安十三歳にて備前國幸川に
て初陣に高名ありしより以来も
さらさ氣したけ高く大の男にて
力量も人に越へ勇氣ありける朝鮮
征伐のときさ文禄元年五月舩への道筋

こゝりの城を肥後守も一城とりて
ありしに肥後か組頭なりし中畠
某なる城外へもさらさ出けるに朝鮮
人是を取こめて討取けるに是を肥後守
無念におもひ來ニなるか帯合戦すへしと
て翌日自らしる兵を卒して城を出
く城門の向ひなる小山の峯にとり
登り備へ朝鮮の兵數万余外の廣野に

押出して充満して働ふことさ老
功の組頭新西伴賀図市之丞申して曰
く此大勢にハあたるへからす早く
城へひきさ取て防くへしといふ肥後守
時に二十六歳ハいふ老功の士事なれともいま
大勢と懸れ臆病につきて夜と引取ら
ハことくく退討に討るへし敵多勢
なりといふとも志一文字に討入て

かけ破り戦ひて引取らハ死地に入て
却て生に逢ふへし夜とハ我に任す
へしとて肥後か備へ小山よりにあ
る松山へ旗さし物小荷駄人夫と並せ
て同勢の跡につゝくやうにみせ戦
兵の備へて小山の高みより岩石を谷
に投ハするこそとく一度に噇と突かゝり
て戦へハ朝鮮人跡勢より崩て敗北

すると追付まゝ逃る方ニ川ありしに
敵を追込数百人の首を取て城ニ入り
其首を秀家公の陣へ送りし実検ニ入
る是朝鮮人を手始の戦なり其外朝
鮮ニて肥後守戦功多しされとも此
戦ニハ自身手をおろせしなるさハ
せさりしとそ　備前軍記

一　肥後守ハ備前中納言浮田秀家の家老
なり天性武勇ありそのかみ文禄元年
朝鮮の土民等おそれ逃る肥後守ハいかにも
く汝等を殺すへきにハあらすおそ
るゝ事なかれとて木札六百を出して
かちあるへし此札持さらん者ハ夜に
来るとも殺す事あるへからすと
土民等大によろこひその札を油紙に
つゝみ頭にかけて心やすく入来るに

四方の商人職人皆みな肥後守か陣所
にあつまりしかハ万に手詰る事なし
材木炭薪魚鳥まても乏しからさり
し　豊臣秀吉記

一文禄二年正月に小西摂津守平壌城に
籠りしに大明勢二十万を以てこ
れをせむ摂津守ある夜城を出て加に
陥るときゝて敵勢起入させしとて加藤清
正ハ兀良哈の境にあり是を越入させ
られしといへとも秀家の家臣三人を
加勢につかハす肥後守も内にして行
けるときゝ清正大にいよ戦あり仰所
勢も一方をうち破る清正感心ありさ
清正随分加勢を頼さるゝやうにもてなし
されまてとあり大明の大明二十万
れ兵を率して開城に入り都の日本

勢すくなきよし と聞て開城川と
渡し候へきよし と聞て海を日本の
案外大名軍議あり各先陣をこふ人
事と定む中に隆景いたくおもんし所
あり先陣ハいかゞあらんずる 我任せへ一日本
と大明の戦れ大事此度にあり 我
老たりといへとも他人に譲らずと
あり然拉肯せす 隆景強て請合け

る間古老たるを以て各是に任すへ、大
明と日本との戦始めなり故と攻め出
させてハ恥辱なりとて今度ハ残らむ
す碧蹄館と出て隆景先陣なり二番
ハ立花宗茂久留米秀包毛利元康より
次第に備へ浮田秀家ハ八番にてそれ
ハ山下なり日本勢ハ山に陣取り大明
勢ハ廣野に陣す山と見りて秀家の

陣ハ敵の本陣へ惣勢よりハ近し秀
家の先手肥後守山よりおりてしたるに
出て備へける辰の下刻合戦はしまり
て隆景一手を討て掛る粟屋四郎兵衛
と云もの志りそく戦ひ退く次に
井上五郎兵衛奮ひ戦ふ明兵猛勢にて
入替て死を顧みす戦ふ甲へ同く退く
時に肥後守古老の組中を下て明軍と

遠見していたりしく突退くるハ今度立
花の手なり彼ハ多分場へ出さとおもふ
立花か手を加へしからハ我横合に掛へさ
とて山に登り見るに案のことく宗茂
戦ひて敵少しく退くと見てしまく
法率に聲をかけて喚さて延引ハ大
明勢本陣より頻に放かすへともさ隆
景の惣勢横槌を入立て先手を討破り

諸大名一同にかゝりけるに大明勢
大崩せしかは肥後守一番に追討す
其中に馬に離れて歩立になり重
き鎧を着し歩行不自由なる敵あり
國富源右衛門といふもの此敵呉國人の
うちに物師なるものと見えけれハ追付
て討けるに鎧よりさしや短劔立す
袖長くしてかなとかゝるみつけて

是を取る男へ切倒す事なりける源右衛門
これとくむ源右衛門日本人にハ究て
大男にして力量ありけれとも是よりは
と丈高かりして力強く源右衛門とを
ま倒し押へけるを返さんと
すれとも身重く力強けれハ叶ハす
喉をひねり殺さんとする更に眼さし
を抜て下より突けるすてにあやうき

へ家人集りて敵を引返す重き物
具まて急に起る事なしさるを漸く
首を討取けるが其外の者とも餘多討取
り かくなみ人 かりとお 惣勢追込かけ開城川へ
追込数千人を討取り川を渡し追
へさといへとも隆景下知して長追を
制せしる是に依て惣勢止りぬ其後
都へ引取と云々

寛永のころ
大樹の御出京とて立花飛騨守肥後
守出會殊に入魂なり朝鮮陣雑談
れとき肥後守いはく開城の合戦
のとき貴公強盛に御拒き大敵を
追崩しまふといへ共飛州いはく貴
方々御陣を突崩しまふ中へ我
勝利まと互に語りて笑ひけると

あり　戸川家譜

一　岡豊前守は朝鮮において死去す此後
は肥後守軍法はかしに及はす諸事一人
にて秀家家中の仕置とす文禄二
年三月大明勢莫大に来りて西
れ城に陣すもとより秀家龍山より
米穀十万石を龍に納置と大明勢の
ねのうちに査大変とい者悉く入置
火をつけてことごとく焼失すこ
是に依て秀家か兵粮乏しく成りぬ
同上

一　秀吉公より御使として福原右馬助
熊谷内蔵允渡海す朝鮮在留の諸大名
へ仰せしは是てもしめ晋州城を
攻落さす越度と承今度惣勢一同に
て攻落すへきのよしあり

もしめとハ三月ニ至加藤遠江守長
岡越中守木村常陸介長谷川藤五郎
彼是七人抜出て番州城を攻む城中
よりも小勢と知て出て戦ふ七将奮撃
せしかとも多勢更に勝事あらさりハ
すり退さけるに城兵いよいよ是を
追ひ七将夜に入て漸く王城に帰る
此事を作らるなり

又七月に浅野弾正黒田如水を使と
して渡海す番州の城主牧司能拒く
れよしと聞しめさせ彼を討取へし
と上意ありける諸将中に談し八月諸将と
ともに番州城を攻む加藤清正小西行
長を先輝として毛利秀元一方に向ふ
浮田秀家一方に向ふ島津義弘鍋島直
茂長宗我部元親蜂須賀家政立花宗茂

小早川隆景黒田長政浅野弾正伊達政宗
一手となり四方より是をせむ城中
よりも強兵を以て是を拒く加藤清正
城西より高櫓を掘崩し一番に攻入る
黒田長政ハ後藤又兵衛に亀甲といふ
ものを拵へさせ厚板の箱よりして其
うちへ又兵衛入りて棒の竿さし地
車として諸人自由に引やりて

石垣ともともに毀ち城に入る肥後か軍
塲並ひ甲へ一度に石垣を顛倒して
城に入る秀元西の方より急に攻入る
によりて城中北勢逃去るを追付にす
あるいは山より落て死しあるいは後の
大川に入りて死す凡二万五千人あり
政宗小勢にて軍忠を盡す秀吉之を感
書を賜ふ大将牧司逃て藪中にして隠る

浮田秀家の物頭岡本権之丞といふもの
牧司の首をとりて降人に見せけれ
ハ牧司に紛れなしといふによりて
其首を塩漬にして名護屋に送れハ
秀吉公の感状を下されけり朝鮮名将の首
を取こと我名にかなふことなりさて
注進に備前先登と是頂の方より国
録にす福原右馬助いはく此城ハ

我よく是を知る黒田甲州の内後藤又
兵衛石垣を毀し先登す其次に浮田
此家臣戸川肥後守黒田長政かり我物
朝のときさす明さん我此陣の旗付
後とありて渡海するまてありといへり
果して物頭のときさ黒田先登とすゝ
戸川肥後守注進仕らるゝあしくさせハ
別儀なく加藤清正と黒田長政との評

ありしとハ清正一番に城に乗らんと云
まゐる　同上

一　肥後守ハ備前の老臣にて三箇國の仕置
一人にて申付るなり依是城御普請に
て諸大名衆に築かさ浮田宰相秀家ハ御
下知を承はり御手傳なり家老承はり
て長船紀伊守勤らるなり　三家老のうち長船越中守嫡子紀伊守ハ
肥後守妹聟なり　此御普請御急さなり殊に御前へ

近し紀伊守根氣を抽んし昼夜相詰る
ち智ありて能精を出す尹へ御意に叶
ひ其以後ハ備前の儀一向に長船ニ申
付之さとの上意なり以前殿下播州
姫路に御宿舘のとさ花房志摩守幸次
ハ御使として御意に叶ひ三家老より
も備前の事ハ大かたなく内く志摩守
に仰付らるゝ也此度紀伊守も上意と

以ての外ニ諸家中ニ構もなくして
人ニ任せケ様ニ肥後守内意ハ隙あれ
とも婿なれハ異儀ニ及ハす其外家老
物頭ハ根惣と含めとも上意の上なれハ善
事なり近年軍役繁く又所々の城
普請諸大名ともニ勝手迷惑せさるハ
なし秀家ハ天下の所婿なるにて所
威勢他ニ異なり奢侈ニ長してまし

箏曲を好て所能とあれハ其方家此
ことく町役ニ掛りて其費莫大の事
なり其外諸営の雑用若干なれハ故ニ
勝手不足なりこれニ中村次郎兵衛
といふ出頭の者あり是ハ秀家の所
前栽ニつさて加州利家ニより来て
与力なりし先代よりの用人浮田太郎
左衛門といふものと両人紀伊守ニ訴

してさま〳〵密議して伏見へ参り
作吉と傾く四年の春紀伊守勘略と號
して三箇國と拝地す作州南備州
播州の内も同じ事あり諸士數代
所持し来る知行と所替させける
故に家人等も數年作り来る
田畠并捨て流浪に似たるもの第
立所に離れ迷惑に及びて次郎兵衛

と恨む家老大身數代の被官ども人に
知らせざる者は兩とて肥近させ所旅
增者多くして收へども家中一遍
に不足に於も以ありとはへども
上意にてかくのごとくさせらるゝ一言も
申すに及ばす岡越前守組と肥後守組
と夏方の先納違以中々に依て両
家引分ち闘諍に及ぶ外の家中の者

ともも縁に縋て具足櫃を以て西
家に行く偏而強勤このことさなり
秀家にの御母堂大方殿とやせしか
御扱にて大なる御留なりしか是非ともに
堪忍仕らへさむと老人を以て仰わさ
出て無事になりぬ 同上

一 慶長元年に日本大明和議にてた
明より冊使として遊撃来朝す

太閤殿下御紀を限りなかりしか大明
此書簡御意に叶はす御機嫌損し大
明の両使和泉の堺へ来りし本國に西
さら仍て朝鮮へ諸勢渡海の事を仰
せられ浮田中納言秀家一方の大将
なと承りて同さ二年三月に釜
山浦に渡る其勢十三万余なり肥後国
又仕す同年八月に全羅道の南原城

と攻む大将ハ秀家之陣ハ小西
摂津守行長島津義弘蜂須賀家政長
曽我部元親加藤左馬助生駒雅楽頭
五万余り一方ハ毛利宰相秀元を大将
として加藤清正黒田長政浅野幸長
其外国勢五万慶州より押寄せ王城
此兵大明の兵と戦ハんと擬す名護
中納言秀秋も一方の大将として全

山浦よありて南京城の後援より全
州の敵を防ぐにハ島津義弘加藤左馬
助関所よりして南将向ふ全州まて南
京城より 南門を 秀家行長を攻肥後守家
来宍甘太郎兵衛 家老なり 青井吾兵衛 物頭なり
一同に壁下に寄く青井先ず壁上
に登る宍甘人ハ登さりと聞ふ人登しと
云ふ太郎兵衛我と引揚てく至よと云ふ

宍甘八老年
志井八若年 青井ゟと戦て引上る際よ
家臣ひとしく太郎兵衛名家の里よ
宍甘一番家よ定まる青井一番よ家て
後よありロおし、さ事なり諸勢よ
先達て肥後守ゟよりの事ハ殿下よ
も聞て所なり主従諸勢家入り富舎
に苦労し討取首三千余級長猛勇と
奮ひ本城と家り破る生捕千余人有り

廿一

しとふ
同上

一 慶長四年十一月宇喜多秀家の臣争
乱ありまりさ宇喜多直家の世
臣戸川肥後守長船越中守岡越前守貞
綱とて三人あり戸川ハ秀家の世よ
いりて叛仕し其子肥後守達安父よ
代りて主職と嗣くといへとも年猶
少し長船も疾病て死す因て越前守

獨執事と號す藩士みな之を執事と称
誉す長船越中守老死して其子又
左衛門其職をつき執事と称す小
田原の役に戸川肥後守とともに従
軍し岡越前守一人従軍せす此時に
當りて宇喜多左京亮成正戸川肥後守
岡越前守貞綱花房志摩守正成長船紀伊
守家老五人ありその後朝鮮の役に

越前守陣中にありて病に臥す死
せんとするに及ひて秀家到て病
を問ふ越前守拝謝して曰く臣死期
既に逼れり然れとも一言を告まん紀伊
守は用ひられへからすすみやく其職
をやめ花房志摩守戸川肥後守に執事
を命せられよ必らす違ひたまふ
なかれと言ひ終りて死す紀伊守は

秀家元より厚く遇するかさハ然に
職を黜けす却て肥後なる職をやむ
因て紀伊守なる権柄を執らしむ紀伊守ハ肥
後なる妹婿なれとも肥後なる邑を恩人て
紀伊守なるを贈りしすさ、さに太閤姫路
にあらしに、さ花房志摩なるを愛して
必らす國政をとらしむへしと命
すなるに伏見城の営作に紀伊守なる邑
に賜り太閤の称誉によりて又紀伊守
國政を司るへきさ命あるにより志摩なる
政を執らす紀伊守いよいよ政を恣に
す同職皆憤を含むといへとも秀家の
厚遇といひ太閤の命といひ敢て言を
發するものなし又中村次郎兵衛とて
秀家の夫人に属し加州より来れる
士あり其性質佞にして紀伊守なるに

端公秀家の近習に列す秀家継に寵
して二千石を与へ中村刑部と改名
し其他備後備中の田畝を正し家老
以下小禄の士に至るまて世々禄する
所の歩数を減し有余ハ皆収納に入る
或ハ地を替て采邑を従すに至ては
藩士恭て紀伊守と刑部を悪まさる者
なし明石掃部ハ四万石を領し寵遇せ

内閣文庫

らる藩中第一の大禄なり其下に我
なしとおもへとも執政の任を受く因て
政事長船明石中村に帰す中に就て
紀伊守尚ら邑を深し刑部ハ且りて
租税し聚斂を勢む掃部ハ耶蘇宗門なり
其ハ数士をすゝめて一藩を傾く宇喜
多左京亮成正同越前守花房志摩守正成
同助兵衛戸川肥後守達安皆是に怒せ

す遂に藩中二つに分れて長船紀伊
なる明石中村延原土佐宇喜多太郎左衛門
等党となすことし春紀伊なる病死し
沖吉兵衛能て又家老となる政事終に
刑部に帰す古老紛擾を発し刑部を
叙さんと党を結びて強訴すれとも
上に達せす紀伊なるに謟ひて登用せ
られし用人寺内道作となりて志を叙し

又刑部と媚ひらん事を後に刑部浴
に夫人に従ひ奥に匿まれて出てす古
老等を出すと窺ふ中村女婿に寄り加
州に逃れ肥後なる達安寺助左衛門
京亮成正志摩なる正成の子源左衛門越
前なる角南隼人楢村監物戸川又左衛門
同主水中吉兵衛等若干人大坂玉造
九郎に入りて門戸となりて従はす

左京亮吾黨に入るものに命して
雑士に到るまてみな髪を剃りて他
氏兵に混せさるやうにせんと一揆し死
戦せんとす既にして大谷吉継これ
を静めんと榊原康政と議み共に
和諧を計るといへとも終に其事成ら
す秀家家老華の事を
神祖に告奉る

神祖命して宇喜多成正戸川達安を
前田玄以に預け岡越前守花房正成を増
田長盛に預けらる其後戸川達安宇
喜多成正花房正成岡越前守
神祖の恩恵を感し仰さ奉りて臣下
にひとし　大三川志

藩鑑巻之百七十一目録
二部二十七
戸川肥後守藤原達安